

およそ二十年ほど前から、「人生の意味」という主題が分析哲学の領域で（比較的）盛んに扱われるようになってきている。スーザン・ウルフとサディアス・メッツを中心に一定のうねりを見せているその潮流は、人がその生に意味を見出す条件を「分析的」な手法を用いて定式化しようとする試みとして捉えることができるだろう。

ただ、もちろん、「人生の意味」をめぐる議論は、それ以前にも現代の英米圏において散発的に展開されてきた。しばしば分析哲学の源流のひとつに位置づけられるウィトゲンシュタインも、この主題にある意味で積極的に踏み込んだ論者のひとりである。

本報告では、ウルフやメッツらの人生の意味論を概観したうえで、特に前期ウィトゲンシュタインにおける人生の意味論の特徴を確認し、それが、最近の議論の枠組みとの対照の下でどのような意義をもちうるのかを探る。この一連の作業は、同時に、ウィトゲンシュタイン哲学の現在性の一端を示すことにもなるだろう。